

「附属の森」大好きを育てる生活科の実践 ～「附属の森プロジェクト」を通して～

藤田智之^{*1}・森本晏以^{*1}

"Forest of FUZOKU" Love Grow Living Environment Studies: Through the Forest of FUZOKU Project TOMOYUKI FUJITA・AI MORIMOTO

抄 録：京都教育大学附属京都小中学校には、「附属の森」という木々に囲まれた小さな空間がある。中央にビオトープ、その周辺には飼育小屋や学年の畑がある。毎年、多くの子ども達は「附属の森」に興味をもち、そこで遊んでいる。

そこで、1年生の生活科の授業において、「附属の森」を中心とした活動計画を立てた。季節の移り変わりを感じたり、生き物に触れ合ったりする中で、自然に親しみをもち、「附属の森」を大切にしようとする心を育てようと考えた。

結果、「附属の森」に主体的に関わろうとし、「附属の森」を大切にしたいという気持ちの高まりが見られた。そのことは、「附属の森」から「僕ら（私達）の森」や「1ろの森」といった言葉からも感じる事ができた。

キーワード：附属の森、附属の森プロジェクト、自然、生き物、気づき

I. はじめに

京都教育大学附属京都小中学校には、「附属の森」という名で親しまれている森がある。右の写真1は、衛星写真から写したものである。北側の校舎と南側の大運動場の間に位置している。

ここには、飼育小屋（クジャク・ウサギ・ニワトリ）があり、4年生の当番活動で生き物の世話をしたり、授業の中で観察が行われたりしている。「附属の森」の中央には、以前、使用していたビオトープがある。現在では、ビオトープとしては使用していない。大きな水たまりとして水中の生き物が生息している。メダカやザリガニ、アメンボ、ヤゴ、小魚などがいる。また、周辺には学年の畑があり、植物や野菜などを植え育てている。1年生から4年生までの子ども達が、中間休みや昼休み、放課後にこの「附属の森」で仲間と楽しく遊ぶ姿を見ることができる。



写真1：附属の森（丸の位置）

*1 京都教育大学附属京都小中学校

II. 実践研究の概要

2.1 研究の目的

本実践研究の目的は、本校の敷地内にある「附属の森」を活用して、季節の移り変わりや生き物との関わりを通して、自然に親しみをもつことである。

本校では、入学後、学級ごとに学校の校内外を探検する学校探検がある。そこでは、職員室や保健室、給食室、運動場など、自分達の生活の中心となる学校内外を知ることが目的としている。また、2年生との「縦割り学校探検」では、2年生の子ども達が1年生に自分達が教えたい、知ってほしい場所を案内してくる。毎年、どの子ども達も「附属の森」や「つき山」を紹介してくれる。今年も、縦割りの学校探検が終わり、教室に戻ってくると「附属の森に行きたい」「学校探検しにいこう」「明日、行っていい」などの声があった。そこで、「附属の森」を中心とした学習計画を立て、年間を通して取り組んだ。

2.2 時期・対象

平成29年度入学生である1年生を対象にして授業を行った。男子16名、女子16名の計32名である。期間は、生活科の授業を中心とした、平成28年4月から平成30年3月までの1年間の取り組みである。

本論では、年間計画の中で実施した、「きせつのおくりもの」と「附属の森プロジェクト」を中心に実践を報告する。前者の「きせつのおくりもの」は、8月下旬から9月中旬までに取り組んだものである。後者の「附属の森プロジェクト」は、11月から翌年2月終わりまでに取り組んだものである。

III. 授業の実際

3.1 きせつのおくりもの

夏休み明けの8月下旬から9月中旬にかけて、「附属の森」のビオトープに生息する生き物の観察を行った。夏休み前に、数名の子ども達が、「附属の森」で遊んでいるときに、「附属の森の池に、メダカやザリガニがいる。」と報告してくれたことで、みんなで「附属の森」のビオトープを見に行ったことがきっかけであった。

多くの子ども達はザリガニを見て、「藤田少年物語2」のグリーン池と同じや。」と口々に話していた。「ザリガニとってもいい。」や「つかまえたい!」「あみもってきていいの?」など、質問してくる子ども達の中に、「先生みたいに釣りたいな。」とつぶやく子どもが出てきた。魚釣りやザリガニ釣りなど、釣りの経験をしている子どもが少ないことから、「附属の森」のビオトープの生き物の観察をしながら、「ザリガニ釣りをしよう」と子ども達と計画した。

計画では、1. ビオトープにどんな生き物がいるか見つけよう、2. ザリガニについて調べよう、3. ザリガニを観察しよう、4. ザリガニ釣りをしよう、5. ザリガニのことをまとめようと大きく5つの活動に分けて行うことにした。

3.1.1 附属の森の生き物たちを見つけよう

夏休み明けに、「附属の森」のビオトープにどんな生き物がいるのかを調べに行った。ザリガニがどこにいたのかやメダカが泳いでいること、さらには、場所によって水が多い少ない、落ち葉がたくさんあるかないなど、子ども達なりの気づきをたくさん持ち帰り、学級で共有した。

写真2は、ビオトープの中央にいたザリガニを指さしながら、二人で話している様子である。この二人は、この後もビオトープの周囲を歩きながら、ザリガニを探していた。

写真3は、ヤゴやザリガニが葉っぱの下にいることに気づき、近くにある棒を拾って、水の中の葉っぱを押し分けながら、生き物を探しているところである。生き物が好きな子どもや夏休み中に池にいる生き物を調べてきた子どもが中心となって、「そこ」「あそこ」と指示しながら、生き物を見つけていた。



写真2：ザリガニを観察中



写真3：生き物を探し中

3.1.2 ザリガニのことを調べよう

生活科の教科目標は、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」³⁾である。「具体的な活動や経験を通して」では、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして、子どもが直接働きかける学習活動を指し、活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの方法によって表現する学習活動と記されている。

まず、体験することから始めていきたいという気持ちから、ペアになって、試し釣りをを行った。うまく釣れたところもあれば、うまくいかなかったペアもいた。もっとザリガニのことについて調べて釣りたいという声があり、ザリガニについて調べ学習を行った。子ども達は、それぞれ家から図鑑や本を持って来たり、インターネットで調べ印刷してきたりしていた。

活動では、ザリガニの生態に関する資料を配布し、何も持っていない子どもには、それをもとにまとめたり、図書館で調べたりしながら、ペアでザリガニについてまとめた。

「食べ物」や「生息場所」、「成長の仕方」、「オスメスの違い」など、本や資料に書かれていることをペアで話し合いながらまとめていった。教室で手持ちや配布資料でまとめるペア（写真4）や図書館に行き、資料を探したり（写真5）、気分転換で場所を変えて学習したりと自分達が学習しやすい場所で活動を進めた。その際、時間と課題を提示して、それを意識させながら行った。以下は、ペアでまとめたプリントである（図1）。



写真4：資料をもとにまとめている様子



写真5：図書室で調べまとめている様子

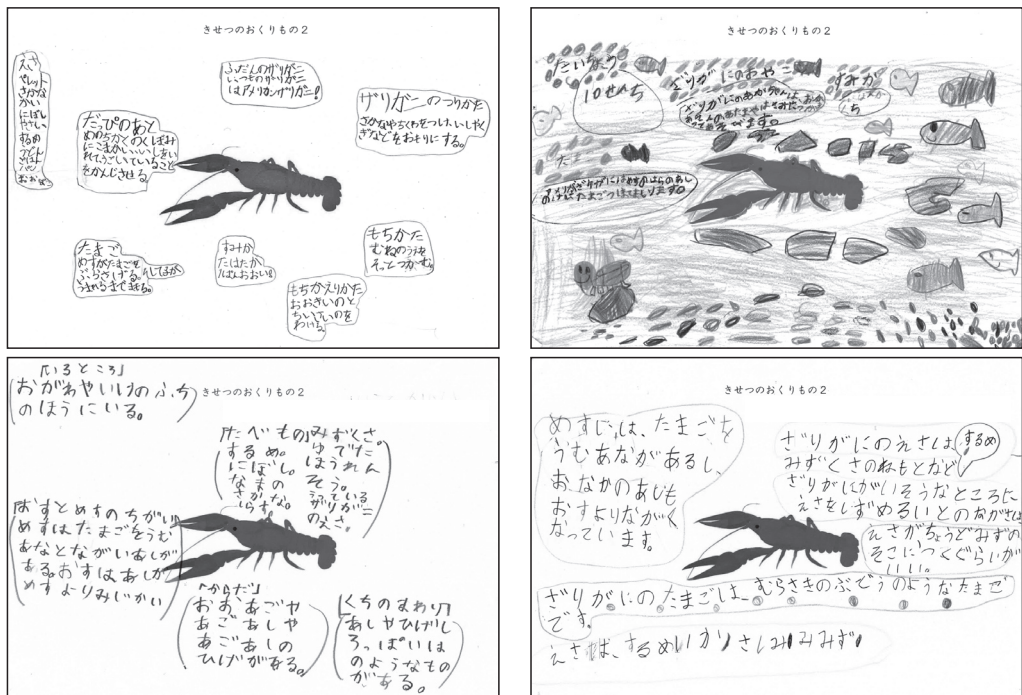


図1 ザリガニ調べプリント

子ども達が調べたプリントを一覧にして、教室の外に掲示した(写真6)。同じクラス子ども達だけではなく、他のクラス、学年の人にも、自分達の学習の様子を知ってもらおう機会とした。教室外への掲示は、子ども達の意欲を高める効果があった。

ある子は、縦割りのお兄ちゃんからザリガニを調べたことや試し釣りのことを聞かれたり、「ザリガニの種類」や「大きさ」、「脱皮のこと」など自分達が調べていなかったことを教えてくれたりと、他クラスや他学年の人との関わりをもつことができた。



写真6：教室の外に掲示

3.1.3 ザリガニを観察しよう

教室にザリガニを持ち込み、トレイに入れてザリガニを観察した。「ザリガニを調べよう」でザリガニのつかまえ方を調べた子や知っている子が、中心となってどこを持ってほしいのかを教えてくれた。持てない子も、一度触れてみたいという気持ちが出てきたのか、触るだけいうことで背中やハサミの部分などをなでたりして感触を確かめていた。



写真7：ザリガニ観察中

ザリガニをつかまえることができる子が中心となって、ザリガニのおなかの部分を見たり、小さい足を触ったり、色の違いや足の数など、自分の興味関心があることを中心に観察することができた。

あるグループでは、元気のあるザリガニがずっと動いていたので、「ザリガニ止まってくれ！頼む。」とザリガニにお願いすると、ザリガニが動きを止めた。それを見て子ども達は、「ザリガニが止まってくれた。」や「ザリガニと話ができた。」という大きな声で喜んでいて。それを聞いた他のグループも「もうちょっと右側に動いて。」や「ブリッジして。」、「ハサミをあげて。」などなど、ザリガニに話しかける姿が見られた。

その姿を微笑ましく見ていると、ある子どもが「みんながザリガニさんをお願いばかりしているから、言うこと聞いてくれへんくなった。」や「いっぱい言い過ぎて、どれをしたらいいかわからんくなってはる。」という言葉に、教室中が笑いに包まれた。ザリガニに対して、ただの生き物としてではなく、より身近な存在になった場面であったと考える。この観察のあと、「今まで怖いと思っていたけど、触れるようになった。」や「ザリガニさんの目がやさしく見えた。」などの感想を伝える子がいた。この活動後、こわごわではあるがほぼ全員が、ザリガニを触り、つかまえて持てるようになった。

観察したことは、一枚のプリントにまとめた(図2)。観察の視点は、これまでの朝顔やザクロ等の観察で学習したことをもとに自分達で考えて書くことができた。「大きさ(体長)」や「色」、「手触り」「数」など、言葉や絵で表すことができていた。

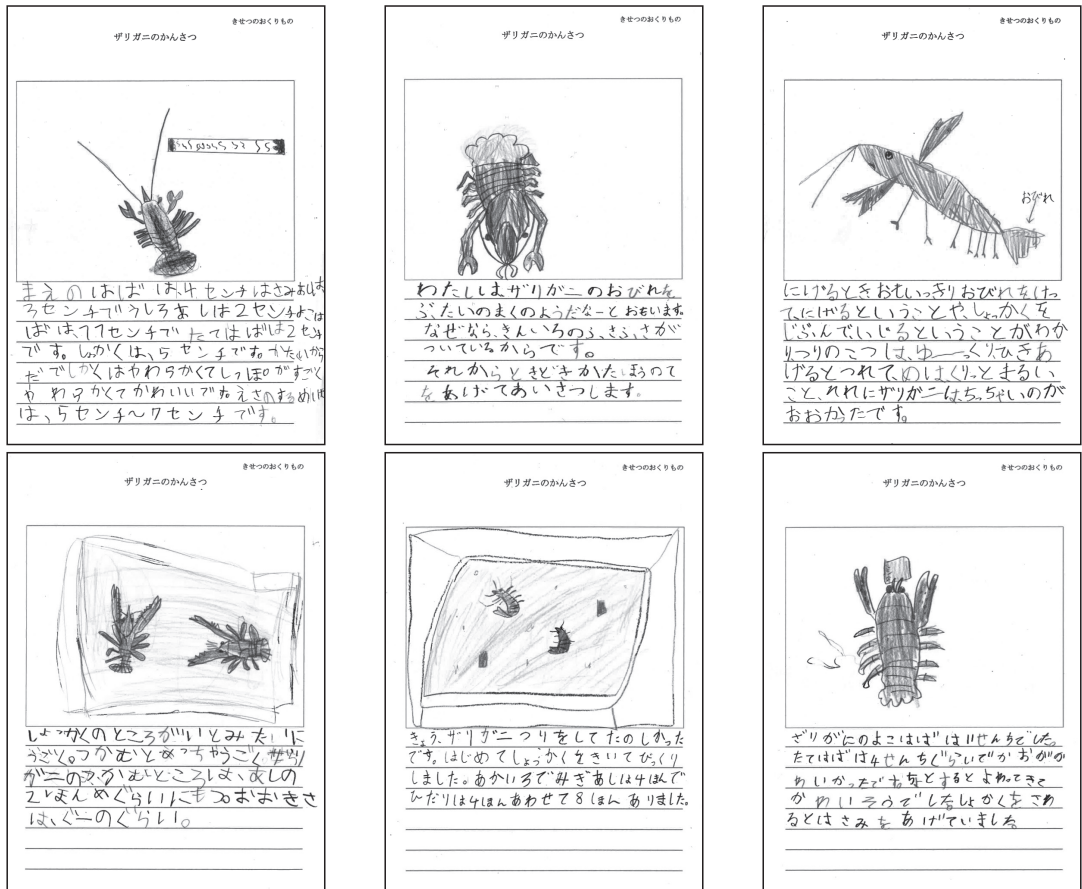


図2 ザリガニ観察プリント

3.1.4 ザリガニ釣りをしよう

朝からワクワクしながら、子ども達は登校してきた。「今日は、すごく楽しみにしてきた。」や「あまり眠られへかった。」「いつもより早く来たしまった。」など、ザリガニ釣りを楽しみにしてきたことがわかる朝であった。

子ども達が調べた「ザリガニの食べる物」や「ザリガニのエサ」の中から、するめをエサにして釣ることにした。前日に、どこにザリガニがいるのかやどのあたりが釣れそうなのかなどを、ペアで調べた（写真8）。



写真8：ザリガニ釣り前日の下見の様子



写真9：ザリガニ釣りの様子

ザリガニ釣りでは、ペアで交互に釣りを楽しんだ（写真9）。一人が釣れると、大きな拍手が起こったが、だんだんと自分も釣りたいという思いが強くなり、黙々と釣る姿が見られた。よく釣れるところに、子ども達が集まってきたり、見えるザリガニを釣ろうと躍起になったりする子もいた。しかし、友達のアドバイスや人のいないところや静かなところの方が釣れることに気付くと、それぞれが思い思いの場所に移動していった。

ペアにすることで、譲り合ったりアドバイスしたり、共に喜び合うことを願った。ねらい通り、釣れた子は、同じペアの子に釣れるまで待ってあげたり、竿を引くタイミングを教えてあげたり、釣れそうところを探したりと協力する姿が見られた。なかには、そのあたりにある枝と何かのつるを使って、独自の竿をつくり、エサの一部を分けてもらい、釣り竿作り職人も出てきた。

3.1.5 ザリガニのことをまとめよう

ザリガニ釣りの様子を廊下に掲示する（写真10）ことで、附属の森に行き、生き物を観察する子がさらに増えた。毎日のように、ザリガニの数やその時何をしていたのかを報告する子や作文に書いてくる子もいた。毎週の自主



写真10：ザリガニ釣りの様子

勉強ノートに、図書館に行って調べたことを書きうつしたものである（図3）。

2回にわたって行ったザリガニ釣りで、全員がザリガニを釣ることができた。特に、1回目の試し釣りで釣ることができなかつた子は、2回目の釣りで釣ることができ、大喜びであった。

釣れた時の思いを聞くことも大切だと思うが、釣った時の感覚を訪ねることで、さまざまな言葉が出てきた。以下は、子ども数名と話したことをメモし、まとめたものである。

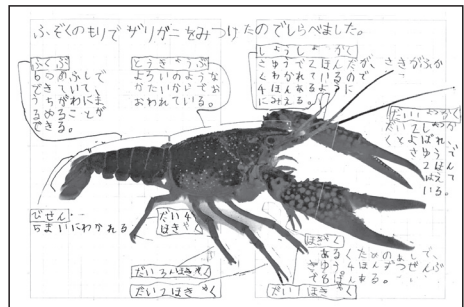


図3：自主勉強ノート

子ども達の表現の豊かさと感じたことを伝えたいという気持ちがひしひしと伝わってきた。

先生：なんでザリガニがエサを食べていることがわかったん？エサをつかんでいることが分かったん？

児童1：先生、ザリガニがエサを食べると、手にビビット電気が来るねん。

児童：そうそう。手に感じるものがあるねんなあ。

先生：どんな感じなん？

児童2：なんか、くっくって引っ張ってる感じ。

児童3：ちょっと、割りばし（竿）が動くねん。

児童1：そうそう、じっと待ってたら動く年ねん。びくびくって。

児童：そうそう。それやねん。先生わかる？

先生：なんとなく。

児童1：あのびくびくって感じ忘れられへんは。

児童：それわかる。

児童4：あのくっくって、なったらすごうれしいわ。

児童：ほんとほんと。

3.2 「附属の森」プロジェクト

このプロジェクトは、「附属の森」を大切にしたいやビオトープの生き物を大切にしてほしいという願いから始まった。平成29年度入学の1年生は、生活科の授業の中でザリガニ釣りを行ってた。他学年の子ども達は、休み時間や放課後にザリガニをとったり、つかまえたりしていたが、一部の子の生き物に対する扱いが許すことができず、何度も報告に来ていた。また、冬に近づくにつれ、葉っぱがたくさん落ちて、池の水や「附属の森」が汚れた時、もっときれいにしたいという子も出てきた。そこで、学級活動や生活科の時間を使い、4つのプロジェクトを立ち上げ活動することになった。

3.2.1 4つのプロジェクトを立ち上げよう

10月4日、生活科の時間の中で、今、「附属の森」について考えていることを出し合った。その中では、ビオトープの中が汚いこと、葉っぱや枝がたくさん落ちていること、生き物を勝手に

つかまえていることなどがあげられた。

そこで①クリーンプロジェクト（附属の森全体をきれいに美しくする） ②水プロジェクト（水の中の生き物が住みよい環境をつくる） ③陸プロジェクト（ピオトープ周辺を中心にきれいにする） ④宣伝プロジェクト（「附属の森」やそこにいる生き物を大切にすることを伝える）という4つのプロジェクトを立ち上げ、自分達でできることを話し合い、活動を進めた。それぞれのプロジェクトでリーダー、副リーダーを決め、その二人を中心に活動を行った。

3.2.2 クリーン作戦

第1回目は、プロジェクトで何ができるのかを考えたり役割を決めたりした。第2回目から、プロジェクトごとに活動が開始されるはずであった。しかし、台風の影響で「附属の森」がひどいことになっているということで、急きょ全員で「附属の森」クリーン作戦を行った（写真11）。



図4 クリーン作戦ふり取りプリント

振り返りのプリント（図4）からも、葉っぱや枝が散乱していたことがわかる。一番右のプリントは、周辺にある畑に水がたまり、その水をかき出したものである。1年生なりに、「附属の森」の変容に驚き、それを元に戻そうとして取り組んだ。「とてもしんどかった。」や「つかれた。」という言葉が、多く記述され、一人ひとりが自分のこととしてきれいに元の森を戻そうとしたことが分かる。その後も、季節外れの台風や強い風雨等で葉っぱが落ち、プロジェクト自体が「美しくきれいにする」という方向で進んでいくことになった。



写真11：クリーン作戦の様子

3.2.3 プロジェクトで活動しよう



写真 12：プロジェクトの様子

第3回目以降、各プロジェクトが、自分達でできることを話し合い、修正しながら取り組む姿が見られた(写真 12)。ただ、「附属の森を美しくきれいにする」のではなく、「附属の森を大切にしたい」や「生き物を守りたい」といった意識が芽生え、学級全体に広がった。

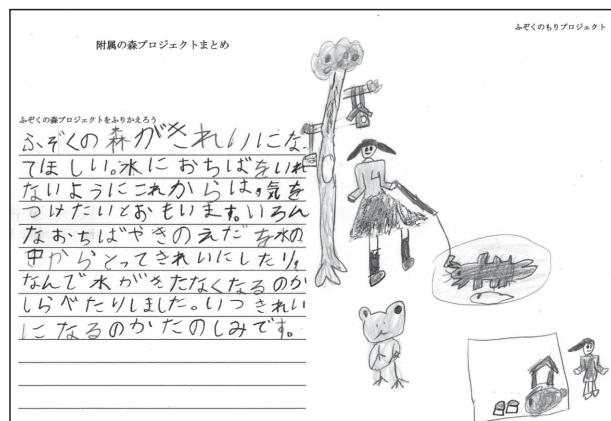


図 5 プロジェクトのふり振り返りプリント①

左のプリントは、プロジェクトの活動を終了した後に書いた振り返りである。上は水プロジェクトの子どもである。水の汚れの原因を調べたり、落ち葉をとってきれいにしたりしたことが記されている。一文目の「きれいになってほしい。」という願いから最後の一文「いつきれいになるのか」と、汚れたままではなく、きれいになる日を待ち遠しく思っている(図 5)。

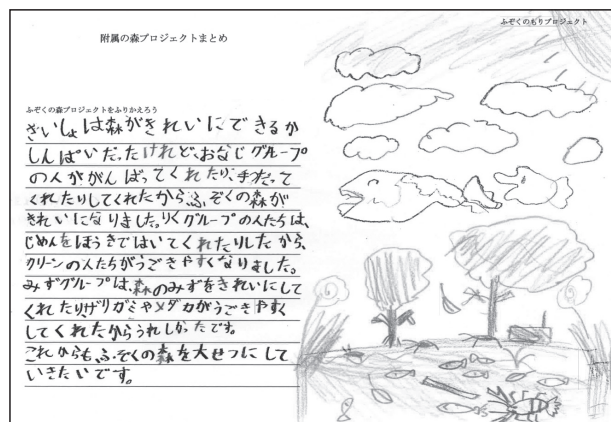


図 6 プロジェクトのふり振り返りプリント②

下はクリーンプロジェクトの子どもである。振り返りの中で、それぞれのプロジェクトが何をしてきたのか、聞いたことや見てきたことをもとに振り返っている。また、仲間と協力できたことで成果が上がったこと、そして、これからも大切にしていきたいという言葉も添えている(図 6)。

多くの子ども達が、このプロジェクト活動を通して、「附属の森」を守りたいや「附属の森」の生き物を大切にしたいという気持ちが強くなった。休み時間や放課後に、ビオトープの葉っぱが多くな

ったら掃除したり、寒くなったり雨が降ったりしたら、水中の生き物達が元気にしているかなど生き物を観察したりすることが、日常の姿として見られるようになった。

IV. 課題

生活科や学級活動の時間の中で、子ども達が見て触れて感じてと、直接経験することがどれほど情緒や発達に影響があったのか等、詳細な分析や検証は必要である。

「きせつのおくりもの」では、生命をもっていることや成長していることに対する気づきがどれほどあったのか、また生き物への親しみをもち、大切にすることができるようになったのかについて、一人ひとりの変容を正確に評価できたかについてはさらに検証が必要であると考え。低学年という発達の段階からも、気づきや関心の高まり等の感情に関わる部分を何で捉え、どう分析、検証するのかといった評価方法の開発も今後の課題である。

「附属の森プロジェクト」では、最初の動機や計画から、修正しながら活動することができたが、グループ活動を行うことで一人ひとりへの対応や手立て、工夫が課題であった。活動から何を学び取らせるのかといったことや毎時間の目標を明確にし、子ども達にも提示すべきであったと考える。

今回の実践研究を通して、一人ひとりがより学びを広げ深めるためには、明確な目標と単元のルーブリックを子ども達に提示し、意識させることが大切であった。この授業、この時間で何を学び、さらに力をつけるためには、どうすればいいのかといった方法を示すことが必要である。その部分の手引きや支援が少なく、子ども達に任せてしまったところにも、課題があった。

V. おわりに

この活動を通して、子ども達は日常の小さな変化に気づき、それを伝え、周りと共有する姿が見られるようになった。以下は、2月下旬の朝休みの記録である。

子ども1：先生、小さなつぼみができている！

子ども2：それ知ってる。小運のところやろ。

子ども1：えっ。そこも、私は中庭のところなんやけどな。

子ども2：うっそー。そこもかあ（少し残念そう）。

子ども3：附属の森にもあったで。

子ども4：そうそう、昨日見つけたんやった！

子ども1：一回みんなで見にかへん。先生もおいでや。

このようなやり取りの後、私も一緒にその場に向かうことになった。

子ども2：うわ〜ほんまや。めっちゃかわいいい。

子ども3：すごく小さいやん。

子ども5：赤ちゃんつぼみや、これ。

子ども1：こっちは、えらい大きいな。

子ども3：さわっていい？
みんなで小さなつぼみを触りだす。
子ども2：ふさふわや。
子ども1：こっちは、けっこうかたいで、さわってみい。
子ども3：ほんまや！
子ども4：わたしも、さわらせて。
子ども1：むっちゃ、（花が咲くこと）楽しみやなあ。
子ども3：なんかうれしくなってきた。
子ども2：ほんまや。なんでなんやろうなあ。
子ども1：また、春になってみんなで見にこような。
子ども5：そんなときになったら、言ってや。

上記の会話のように小さな変化に気づき、それを報告し、自分のこととして喜んでいる子ども達の姿を見ることができたとき、今回の実践研究が日常の生活で生かされていると実感できた瞬間であった。

生活科の学習では、「体験や経験」が大切である。身の回りの自然を通して、その変化を日常のさまざまな場面で共有できたことは、私達にとっても子ども達にとっても、貴重な経験であった。年間を通して、それぞれの気づきを、仲間と共に認め合ってきたからこそ、一人ひとりの想いや気づきに反応し、自分のこととして喜び、協力できたのではないだろうか。

また、「1年生だからできない」や「そんな大変なことは無理だ」ではなく、担任と副担任が常に前向きに考え、話し合い、実践できるように準備を進めたことで、無理だと思われた活動を数多く実現することができた。ザリガニ釣りや「附属の森プロジェクト」などがその一例である。

今回の実践研究で明らかになった成果や課題をもとに、さらに詳細な分析を行い、次の生活科の実践につなげていきたい。

註

1) google 衛星写真

https://earthmaps=apan.com/?gclid=Cj0KCQjwuuHdBRcvARIsAELQRQETq9LA50s6TWcdRvJGGmPC6ZrgE8UpCl686Uc-U6TEMkZh2PMJVYwaAiJYEALw_wcB

2) 「藤田少年の話」は、担任である藤田の少年時代の失敗談であり、毎年、季節ごとに話すものである。

3) 学習指導要領 生活科

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afielddfile/2009/06/16/1234931_006.pdf

謝辞

小原副校長先生、大浦教頭先生には、「附属の森」の使用の許可等を含め、授業の様子や学級へ数多く足を運び、見守って下さったことに感謝いたします。